

座長のまとめ (11~14)

本多芳男 (慈恵医大耳鼻科)

第IV群は指定演題で予め会長より出されていた薬物エアロゾル療法により副作用、主に呼吸器粘膜よりの感作と抗原抗体反応などについての演題である。演題11、13は動物実験の結果より気道粘膜よりの感作が成立する事を実証した方法で、演題12、14は人を用いた鼻アレルギーの診断法として考えた鼻腔抵抗の変化および、気道粘膜の過敏性を調べた実験である。

元来動物に鼻アレルギーを発症させる事は困難を伴ない人同様の経路での発病は未解決とされて来た。馬場氏(11)はモルモットを用い抗原性の強いとされている Bacterial α -amylase 溶液のエアロゾル吸入を7日間行わせ、10日休止の後に再度同様操作を行なった処、100%アナフィラキシーショックを起こしたと報告した。この際感作成立と共に Ig G₁ 抗体が上昇し、再感作時に発症したクシャミ、呼吸困難の程度はIg G₁ 量と一致し、また再感作後はIg G₁ の低下と共に遮断抗体Ig G₂ の増加が起こり、それによって再度吸入しても無症状であったとし、Ig G₁、Ig G₂ 量の増減が症状と平行である事を報告している。

演題13の今井氏他の実験は卵白アルブミンをマウス腹腔に接種して産生されるIg E抗体の量が予め7日前にエアロゾルにてアルブミンを暴露しておくが無処置群より増加することを報告して来たが、今回はアルブミンの代りにリゾチームを用いてもIg E抗体を産生出来ることを報告した。人の治療に使用する薬剤の吸入によってアレルギー症状を動物実験によって起こさせることは動物の種によっても差はあろうが、困難とされて来た。今回はIg E抗体産生量の増加を以って吸入剤によりアレルギーの発病し得ることを実証した訳である。馬場氏の実験ではIg Eについての測定結果は示されていないが、何れにしる気道粘膜より感作され、副作用の起こり得ることを実証したもので、この種の治療法実施についても充分な注意を払う必要があることが警告された。

演題12の西田氏は鼻アレルギー診断に用いられるディスク誘発法の代りに抗原エアロゾル吸入を行なわせて鼻腔抵抗、鼻腔温度の変化を測定し、この方法の診断上有意義なことを示すと共に、生理食塩水、ヒスタミンの使用による測定値の変化も報告した。この際抗原吸入は鼻より入れ、口より出す方法が取られ特に副作用は無かったとの事である。茲で野村氏より追加が行なわれ、ペニシリンネブライザー施行中の部屋に入室した直後、空中に撒布された霧の吸入によりアナフィラキシーショックの起こった事例も示された。

14席石塚氏は鼻アレルギー患者にメサコリン液ネブライザーを行ない口呼吸時の呼吸抵抗を測定し、正常者は呼吸抵抗の上昇を認めないのに反し鼻アレルギー患者においては91%に抵抗上昇を認めた事を報告し、鼻アレルギー患者は下気道においても過敏性が高く、それを検査することの有用性を示し、鼻アレルギーのスクリーニング診断上にも意義ある点を報告した。また咽頭異常感症患者中にも下気道過敏性のある者が含まれている事を報告した。

演題12、14は鼻アレルギーの補助診断或いはスクリーニングテストとしての新法を報告した訳にもなるが、今後これらの方式により測定値を以って症状の程度が表現出来、またそれが臨床上に有意義であれば興味あるものになろう。今後の追加発表を期待したい。